

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第 2 期 7 号 — 通巻第 19 号 —)

Working Paper Series 2-7-12

2012 年 3 月 31 日

第III部：岩田弘追悼文

岩田弘氏の逝去を惜しむ

櫻井毅

(武蔵大学名誉教授 t.sakurai_at_piano.nifty.jp)

http://www.unotheory.org/news_II_7

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail:contact_at_unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>.

岩田弘氏の逝去を惜しむ

櫻井毅

去る1月31日の夜半、岩田弘氏は忽然世を去った。満82歳の高齢ではあったが、まだまだ意欲に燃えて研究と執筆を続けていただけに、まことに痛恨、哀惜に堪えない。1955年、大学院で私が彼の1年下の学年に入り宇野ゼミとともに学んで以来だから、時折の中断があったにせよ、交友は実に50余年に及ぶ。彼の世界資本主義論に説得されるには至らなかったとしても、私に与えられた学問的影響は大きく、さらに時代を共に過ごした同時代人としての体験は、折々に聞いた彼の鋭い分析の記憶とともに、本当に得難い貴重なものであった。最近ではしばしば電話による会話を楽しんだことも今では忘れ難い思い出になってしまった。まことに惜しまれる突然の別離であった。

岩田弘氏は1929年2月22日、三重県に生まれた。兄弟4人の長男である。国鉄に勤務していた父親が中国に転職、単身で赴任すると、母親と子供は母親の実家のある三重県の鈴鹿に移った。三重県立神戸中学校に入学していた岩田氏は、戦時中なので高学年になると勤労働員を受け、現在の四日市近くの陸軍工廠で大砲の砲丸の生産に従事した。そして終戦を迎えた。戦後、帰国した父親に従って開拓農民となって働いていたが、2年ほどたって名古屋の経済専門学校に入学した。そこでは簿記を学び、アダム・スミスの『国富論』やヒックスの『価値と資本』を英文で読んだりしていたが、やがてマルクス経済学のとりことなり、『資本論』を熟読するようになった。たまたま名古屋大学に集中講義に来ていた宇野弘蔵氏の講義室が専門学校と同じ敷地内の建物だったので、当時専門学校3年生であった岩田氏はそこに活動家の仲間を引き連れてもぐりこみ、聴いた経済原論の講義にとっても興味を惹かれたという。そこで質問したり喫茶店まで連れ出して話を聞いたりしたとのことだ。岩田氏の話では、マルクスの理論に疑問を持ったところをぶつけると、ともかくきちんと受け止めて答えてくれたのは宇野さんだけだった、ということなのだそうだ。しかし彼が旧制の名古屋経済専門学校を卒業してまだ旧制だった名古屋大学経済学部に入學した1950年頃は、朝鮮戦争や講和問題などがあって物情騒然としていた。1952年に日本共産党の武装闘争の一環として名古屋に大須事件が起き、それに積極的に参加した岩田氏は逮捕され告訴される。拘置所では『資本論』をぼろぼろになるまで読んだという伝説があるが、岩田氏に聞くと、読んだのは『剰余価値学説史』で『資本論』

ではなかったようだ。彼はこれをしおに実践活動から遠ざかり、名古屋大学を卒業後東京へ出て、東京大学の大学院で研究者としての道を歩むことになる。1954年のことである。しばらく交渉が途絶えていた宇野弘蔵氏と再会を果たし、宇野教授の演習で学ぶことになった。同期に降旗節雄氏、武井邦夫氏などがいる。

岩田氏は宇野弘蔵氏に強く啓発されその強い影響の下に理論的研究を進めていたが、すでに独自の思考回路を持っていた岩田氏は、やがて宇野氏の考えをさらに転回させて自らの世界資本主義論を構想し、その方法を発展させるとともに、世界資本主義の内面化論として「経済学原理」を位置づけるに至った。それは資本主義の発展過程の歴史的抽象の成果としてとらえられた純粋資本主義像をその方法の基点に据える宇野経済学方法論とは相容れないものであった。その考えが固まってゆく過程で宇野ゼミではしばしば宇野氏と岩田氏との間で論戦が行われた。岩田氏は自分の考えが宇野氏の思考の一面をとったものであるにすぎないと執拗に説いた。宇野氏はまったく肯んじなかった。宇野氏を敬愛する岩田氏は少しでも理解を得たいと繰り返し説明したが、宇野氏は聞き入れなかった。名古屋で初めて出会った頃「よく出来る学生がいる」と語っていた宇野氏もいささか手を焼かれていたようであったが、議論の相手を拒む様子はまったく見せなかった。岩田氏が修士論文を未完成のまま提出しても宇野氏が通してくれたのは、岩田氏の研究者としての稀な素質を見抜いていたからに相違ない。岩田氏は宇野氏が機能の羅列にってしまったと考える貨幣論に、当時出たばかりのマルクスの遺稿『経済学批判要綱』の叙述の力を借りて、そこに内的な論理の展開を試みようとして果たせなかったのである。

その頃、宇野ゼミでの議論は岩田氏の提起する問題をめぐって議論になることも多くなった。流通論の展開をめぐる議論から、やがて対立するのは純粋資本主義論と世界資本主義論とである。といってもゼミの中では降旗氏が後者の半ば理解者であったほかは、ゼミの先輩諸氏はもちろん、武井、大内秀明、阪口正雄、鎌倉孝夫などの諸氏や私など、ほとんどすべて純粋資本主義派であった。世界資本主義派といっても岩田氏ただ一人である。いわゆる応用経済学の領域にも岩田氏の影響は及んだが、大内力氏の理論的影響下にある実証家達はほとんど世界資本主義論に否定的であった。そのような応用経済学の領域は別として、大学院の理論経済学の領域でそういう状況が変わったのは宇野教授が定年で退職し、宇野ゼミを引き継いだ鈴木鴻一郎教授の演習に代わって若い院生が新しく加わってからである。鈴木鴻一郎教授の経済学原理の講義が学生に大きな影響力を持ち、その鈴木教授はその講義の中で、岩田氏の世界資本主義論に大いに肩入れをしてくれてい

たのである。ゼミの中で我々は古い宇野派として外様の扱いを受けるようになった。とって議論が活発でなくなったわけではないし、関係が険悪になったわけでもない。むしろ岩田氏の問題提起を受けて宇野理論内での研究は活性化した面があったといっても間違いでないだろう。

やがて我々も大学院を去る時期がやってくる。かなりの就職難の時代ではあったが、少しずつ大学に就職が決まっていた。岩田氏の就職はなかなか決まらなかったが、1962年、立正大学経済学部で職を得ることができた。1965年には東京大学から論文「資本主義の歴史的発展と理論体系」で経済学博士を授与され、翌年教授に昇格している。

その頃は日本各地でいわゆる大学紛争の嵐が吹き荒れていた。岩田氏は無関心でいられなくなった。彼が「ブント・マル戦派」で理論的指導的役割を演じたのは、彼の経済分析からの見通しからでもあった。その間、岩田氏は『世界資本主義』(1964)を刊行して我々の間で話題を呼んだ。それは論文集ではあったが、意図は鮮明で論旨は明快であり彼の存在感は高まった。また続く『マルクス経済学上下』(1967, 69)は彼の理論的立場を総括的に示すものである。しかし彼の見通しが崩れると彼も実践から身を引くことにならざるをえない。1980年、一時退職した立正大学に戻り、以後、ゼミでは学生を熱心に指導し、研究会も頻繁に開いて研究活動を積極的に進め、学内のいくつかの行政職も経験した。またその間、海外研修の機会に世界各地を旅して、その世界資本主義論に地勢的な興味を広げた。そして共同体が彼の関心の中心に座ってきた。『現代社会主義と世界資本主義』(1989)がその時期の著作を代表する。1999年3月の定年による大学退職後も、研究は同じ方向でさらに視角を広げて継続された。そして「現代史研究会」などでの啓蒙的な活動も含め、それは従来の社会主義論の再検討を押し進めるとともに、中国経済の展開と情報革命の役割がさらに新しい視野に入れられた。関心は進んでメイン・フレームからクライアント・サーバ・システムへのコンピュータ技術の展開に大きな期待と評価を与え、有機体との構造的相似という超未来的構想にまで入るに至ったのである。装を改めて増補刊行された『世界資本主義 I』(2006)に加えられた「新情報革命・新産業革命と新資本主義の登場」と題する第1部がある程度その内容を明らかにしている。それ以後の研究については以前から構想されながらついに未完に終わった『世界資本主義 II』が、そしてさらにそれに続く著作が、その内容を具体的に詳細に示すものになったはずである。しかし岩田氏は原稿を何度も書き直して目次まで構成しながら、ついに原稿の完成には至らなかったのである。遺稿として残されたおびただしい草稿の存在が、そのことを示している。まことに惜しまれるが、ただ中国の古代史から研究を始めたことなども含め、問題の領域をあまりに広げすぎたきらいがある

と思う。私は枝葉は捨てて早く根幹だけでも生きているうちに完成するよう何度も勧めたのだが、叶わなかった。岩田氏のように大きな構想力を持ち緻密に論理を組み立てる研究者は稀である。我々は残された大いなる期待を失ってしまったことをここに嘆かざるを得ないのである。

岩田氏は「原論」をもう一度やってみたいと語っていたそうだ。今度は宇野氏の『原論』でなく、もう一度マルクスの『資本論』を相手にしてやってみたいと述べていたそうだ。また生産過程論をとらえなおす必要があるとも述べていたらしい。内面化論にも反省を加えていた様子だ。何を構想していたのかわからないが、岩田氏の非凡な発想には興味を惹かれるところが多い。失われた期待にあらためて残念の言葉を繰り返すしかない。

ところで岩田氏の誕生日は丁度宇野氏の命日に当たる。偶然ではあるが一つの運命を感じてしまう。厳しく師の説を批判しながら師に対する敬愛を最後まで隠さず、最近の研究者が宇野氏の思考の奥深さを理解していないことを嘆いていた岩田氏に対して、あくまで自説を曲げることなく岩田氏をたしなめ続けた厳格な恩師は、死後の世界で再会して何を語り合うのだろうか、と、つい想像しなくなってしまうのであるが、今はただ岩田弘さんの霊に心から哀悼をささげるしかない。

柩に入れられた岩田さんの周りには多くの花でうずめられた。あふれる白い花の中に何本かの真紅の花が目立った。岩田さんはいつもとまったく変わらない表情で、はにかむようなわずかな笑みを浮かべているように見えた。つらい別れであった。心からご冥福を祈りたい。

(2012年2月13日)